

本草圖譜

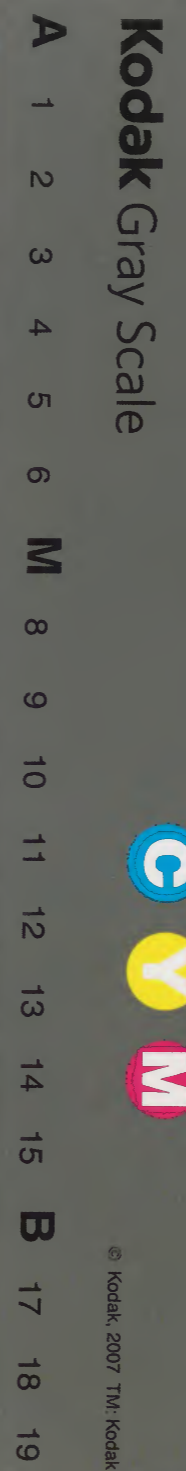
卷之八十二

和書門			
三	六	六	類
函	架	冊	四
號	五	冊	五

內閣文庫	
和書	三六六
類	四五六
架	函架

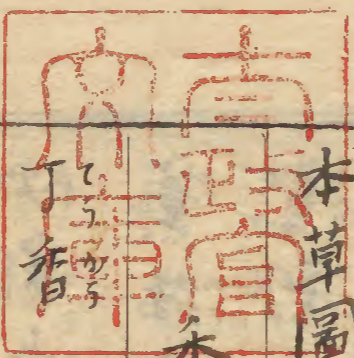
植物
30

內閣文庫	
番號	和 366
冊數	45 (38)
函號	196 189





本草圖譜卷之八拾二目錄



香木類

てうじ

一

丁香皮

三

丁香

一種

天竺の物

四

一種

雞舌香

五

丁香

雞舌香

物印に載る

六

舶来の実

檀香

白檀

集解

黄檀

紫檀

上同

七

本草綱目 卷之八十一

降真香

不詳

樟

くすのき

九

釣樟

くすのき

一種

十一

烏薬

十二

一種

十三

一種

一石七じ

一種

十四

必栗香

不詳

楓香脂

とろかへて

十五

薰陸香乳香

物印忙に載る

十七

一種

十八

没薬

同上

十九

麒麟竭

同上

廿一

質汗

不詳

安息香

同上

麝合香

物印忙の回

廿三

一種

同上

麝糖香

不詳

結殺録

同上

篤耨香

同上

龍腦香

廿五

樟腦

くすのや子

阿魏

物印忙の回

廿六

一種

蘆薈

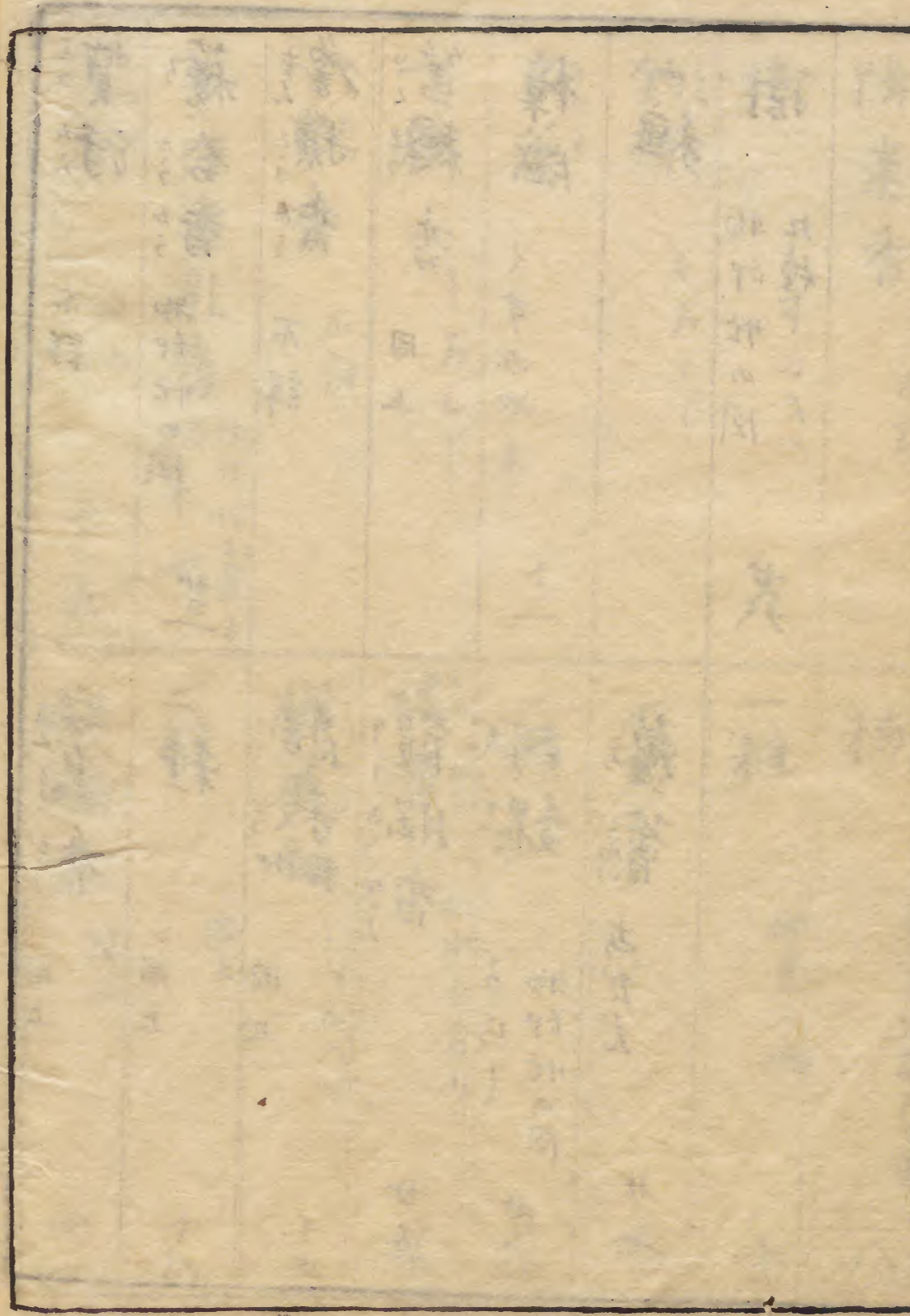
あだん

廿七

同

物印忙の回

廿八



本草圖譜 卷之八拾一

東都 岩崎常正著
男 岩崎信正
小山廣孝校

香木類

丁香かうかう

てうじ 百結花 檢毒 隨筆
ころいどないける蘭ないけるほむ上
ないへる上りくぬむいんちやきぬす羅
いんちやあんせほと蘭かりよひる一みれと羅中 嶋譯
むいるないげる荷蘭 同上

本草綱目 卷之八十一



本草綱目卷之六十一
物印忙載る圖

和産在し東西洋考に暹羅渤泥蘇門答刺より来る蛮国に香
山あり滿山皆丁香あり雨後溪水に隨て山の麓に多く流れ
出るを拾りて中國の商人に賣ると云り然れは唐山にも無
く見たり和蘭物印忙に因あり樹皮黄色葉は柯樹又橘葉に
似て葉生し枝の梢に細枝を分て数十顆を結ぶ葉長くして
未だ中実頭形瑞香花に似て黄福色に馬志の説に丁香
香生交廣南番檳榔州回上丁香樹高大餘木類桂葉似標葉花
細黄色凌冬不凋其子出枝莢上如釘長三四分紫色と云能
此説に合ふ又同書に丁香の花の因あり枝の梢に二三花を
開く形錦帯花に似て葉緑色淡紅色ありて五六の瓣あり中
より淡青色の莢を生し黄色の点ありこれ珣の説に丁香生
東海及崑崙國二月三月花開紫白色と云るに合り大和本草
子藥肆に煎したる淳を賣りありしらふて久しく存りて香
薄きは酒にひたせば香生すと云り丁香は別の貴賤在り中
嶋も位の貴賤を以てたり新香佳と云るも商家には乾け
たなるを賣用とせといへり

丁香の樹皮に田村氏の説に丁香皮の形肉桂の如く厚く香
下香の如くして烈きもの燂飯丸の方中に入ると中を温
め食を消化する切あり一種偽物の丁香皮あり外は丁香の
香氣水比内は肉桂の香氣あり咬嚼吧肉桂を以て偽造る
薬用には入るべからず本經逢原には丁香皮を以て肉桂を偽
とあれは今丁香皮少きゆへ肉桂を以て丁香皮を偽る古と大
に異なりと云へり

丁香皮

丁香の樹皮に田村氏の説に丁香皮の形肉桂の如く厚く香
下香の如くして烈きもの燂飯丸の方中に入ると中を温
め食を消化する切あり一種偽物の丁香皮あり外は丁香の
香氣水比内は肉桂の香氣あり咬嚼吧肉桂を以て偽造る
薬用には入るべからず本經逢原には丁香皮を以て肉桂を偽
とあれは今丁香皮少きゆへ肉桂を以て丁香皮を偽る古と大
に異なりと云へり

本草綱目 卷之八十一

丁香

一本の蘭西に載る図其葉菌芋に似て穂を形

は和俗稱もる

の如く枝

幹節も

紅紫色子も

又紅色散は

前図に同し



一種

蘭人一一ほると

持来る物の図天

竺に産する処の

品のよし



一種

舶来のきし葉の圓葉の形柿の葉に似て大い葉の本に房を存して花
をかき開く形かき小く前條の圓に似たり



鷄舌香 名

亭尖獨生 本草和名 引丹口訣

舶来の実の圓長さ七八分より形樞かきの实カ如く由粟三四瓣あり
紫褐色なり此葉子の用よ入水薬用よは宜しからず雷敷の説
此者大如山茶葉名母丁香といへり華夷花木珍玩考ニ唐本
註を引て鷄舌樹葉及皮並似栗花如梅花子似栗栗樹此雌樹也
不入香用と云り

丁香

舶来の実の圓形すいかうの花よ
似て紫褐色長さ五六分先子花の实
の如きものあり香氣よ



鷄舌香

りぐぬむいんちき
ぬむ 羅甸
いんちあんせほーど
荷蘭



本草綱目 卷之八十一 六

物印忙の載のる因葉は栴ぢ以て五生ごせい一いち枝の間に実みを結むすぶ形かたち石榴ざくろに似にて小こよりて黄褐色おうとくしやくなり

檀香たんかう 贊那ざん日に表ひょう 諸しよさんてるほほ一ひととと蘭らん 里りぐぐよよゆゆむむささ一ひと たるたる羅ら甸けん

和産わさんなし檀香たんかうは惣そう名なよりして三種さんしゆに分わかつ 方言方言

白檀ひやくたん 集しゆいりやろろすす 蛮蛮 白銀香はくぎんかう 廣東くわんとう 新語しんご 欖らん 檀たん 通つう 雅や

摩羅まら度ど 梵ぼん 語ご

白檀ひやくたんは和漢通名わかんつうなよりして舶来はくらいあり質しつ柔じゆうよりして脆ぜいく白色はくしき香強かうかうし中島なかつしま云和わして護神ごじん音おんと云いふ白檀ひやくたんの上品じゆうひんより出いることといへり

黄檀わうたん 上じやう 目め

舶来はくらいの物ありこれをまめのここと云いふ黄色わうしきを帯おるものここ又黄色わうしきより油色あぶらいろを帯おるものもあぶらあぶらとと呼よぶ白檀ひやくたん黄檀わうたんの二品にひんは上じゆうよりして薬用やくようない香かうとと用ようゆ

紫檀したん 上じやう 目め 紫榆しよ 廣東くわんとう 新語しんご 紫栴しよ 木ぼく 註しゆりいよいよせてれいすれいす 蘭らん

ほうせんほうせんととる かりまてゆゆ一ひとるほろろとと上じゆう

りぐよゆむりぐよゆむかりまてかりまて 羅ら甸けん

古渡この物ものは木理もく細密さいみつよりして甚かたた堅かたく紫黒色しよくろしき之新渡しんの物ものは木理もく粗こよりして紅紫色こうしよ之諸しよの器物きぶつに造つくる香かう氣きなく薬用やくようには栴ぢに用ようゆることあり大和たいわ本草ぼんぽうの釈しやく氏しの云いふ赤旗せき檀たんといいへるは紫檀したんなるべしといいへり

樟

うらじろぐす江

しゆろのき 武列 品川

からだも にかいのき 西

をほのき 相州 鎌倉 あきき 防

しろだも

まだみ 八丈島草たみあ 舟子造るに堪といへり

みといふ

樟するに此物樟なり江列又武列東

嶽山其外にもあり葉は菌芋に似て莖

紫色夏月丁香に似たる花を開

き後実を結ぶ又丁香に似たり熟

色は灰白色に八丈にて此根皮にて

色を染又此実を食すと云材は





樟

くすのき
せうのらぼく
なんじやもんしや
朝腦 本草
原始
かむへる 虫語
茅



葉は天竺桂に似て短く互生して冬凋
まず春新葉を生して後宿葉落る葉
とし樟樹の氣は夏月白色に微し黄色
を帯る小花を開き実を結ぶ熟し
て黒色なり此樹を製して樟腦を採
る

一種

葉の形前條より細く長く花実共に前條より細く



本草綱目 卷之八十一 十

Lindera sericea, Bl. Lauraceae

釣樟

くろもじ

あしや列信

せうかのき西

ぬ前

とりこば

くんぬまくしぬぬ

蠟吏

植物綱目 卷之八十一



山野自生多し木皮淡緑より黒斑あり香気よく此木より牙枝を製す葉の柯樹に似て硬く互生を存し春月葉み先て花を開く五瓣淡黄色より四五花窠生す後実を結ぶ大に南天の実の如し秋に至り熟して黒色に

はなが葉長く大より一葉の葉み如くみして硬し花実はくろもじの如し



植物綱目 卷之八十一 十二

烏藥

矮脚樟

物理小識

雲裡紅

同上
実名

和産ホー享保年中漢土より天台烏薬と衡州烏
 薬と二種渡り諸国官園に裁らせられ今世に多し
 其台州烏薬之灌木にして高さ八九尺根の傍に
 多く科條を生ず葉互生して形菌桂に似て円く
 小く三縦道あり面深緑色にして光澤あり北月
 は微し白色を帯下三四月葉の間小黄花を旗生
 す形状鈎樟の花に似たり秋月実を結ぶ大さ冬青
 子の如く熟すれば紅色此実より油を搾り燈に
 点すべし根は餘木に異なり形巴戟の如く連珠
 を亦す香氣ありて舶来に勝れり此物集解蘇
 頌の説に符合す



本草綱目 卷之八十一
 十二

一種

天台衡州と二種舶
末の内の衡州の物なり
樹葉、秋状天台烏薬に
似て葉、長みあり樹叢
生せしして大樹となる根
は連珠をなす常の樹根
の如く香氣薄し花
実も又天台の物と異
なる一なり



舶来の烏薬多くは陳久よして香氣薄く用ゆるに堪ざる物あり
宜新根を用ゆべし此内よく、りてと呼ぶものは根百部根の如くこれ
集解に連珠の如くと云上品なり此物台州烏薬根なるべし又棒さ
こと云ハ連珠をなさず常の樹根の如し此物下品なり

一種

しろもじ日光

うこんはな 京

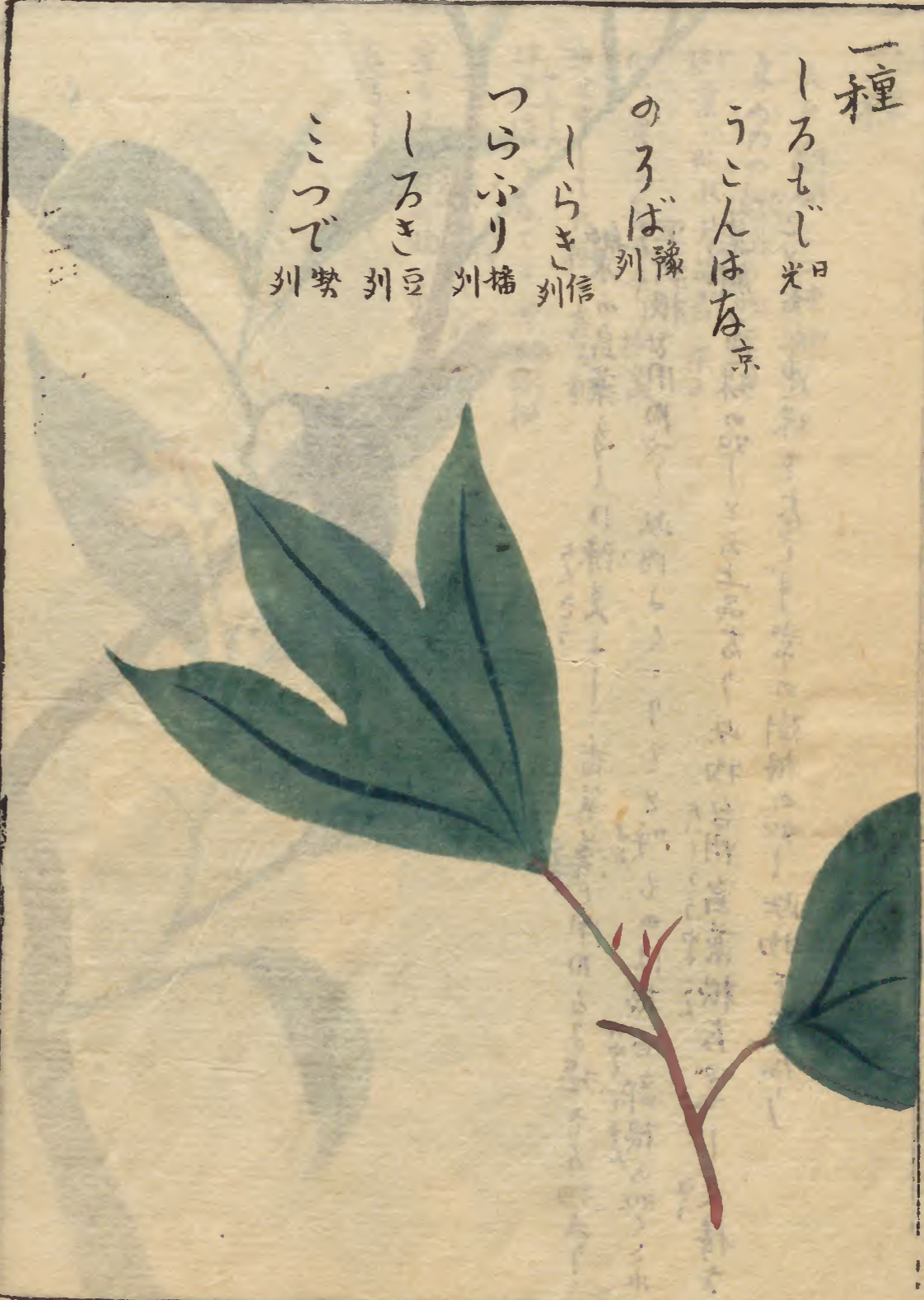
のろば豫 列

しらき信 列

つらふり播 列

しろき豆 列

こつで紫 列



藏書の説二葉三極といへるよりて古人此物を充山中より自生多し樹高さ一丈計り二月頃枝の梢に葉の先つて花あり房をなして形釣樟に似て淡黄色の葉互生一葉三極をなして形葉の子の葉の如く老樹となれば同葉も雜り生す冬月に至り落葉す根は連珠をなさず微し香あり此水又別種みあらむ烏薬の一種なり文政九年朱朝の蘭人しほるといふ物を問ひしよさつさうらすよて神経を強壯と為すよ要薬なりといへり

樓香 かぬぐるみ

やす前のぐるみ さぬぐるみ 尾

ちべれけ燧 更 ふらつくせう す荷人しほると

堯樞樹 救荒本草

葉の形胡桃に似て小く春葉の間は花を生ず形胡桃の花の如く長く本葉を結ぶ樞の樹に似て円く大和本草に賤民以て沈香と代といへり集解に葉小葉に似たりと云根又枸杞に似たりと云を合せ考か小水はのくるみを充るも近しとす

懷香



楓香脂

とうかへで
楓香 方防

芸香 本草
原始

享保年中公命よつて
漢種をとりよせられ東
都の種させられ今大樹
となり高さ二三丈に至
る葉は大より半の
如く三の尖りあり春の
末葉の本は花を生ず秋
かゆくろみの花の似たり
後実を結ぶ形悪実の如く周りを軟き刺あり熟すれば
褐色となりて落る此実を焼ハ沈香の三葉あり葉晩秋に至り
黄色となりて散落すかへでの趣あり



薰陸香乳香
的乳香
滴乳香
明乳香

黄明乳香
白乳香

雲華汎腹
君杜魯香

ますていつき
きぬのみますていつき

べりぬあーんせますちきぼーむ

薰陸香樹は和漢とも存故集解の諸説其形状明かな
らす或は松ノ類すと云或は棠梨ノ類すと云み存傳聞の
みよして決せず物印忙を以て按ずる乳香なるもの二種
あり一種は葉の形接骨木の葉に似て鋸齒ありて對生一房
をなして小黄花を開き子を結ぶ大と蠟燭の子の如くよ
て紅色これみ真の物なり此樹より出る脂浪凝結して塊を
なす形乳頭の如きものを乳香と名く黄白色よして石を雜

す透明なるを玉棒と云上品とすこの品唐山より持渡り薬店にて古く公と
り、又俗に玉乳香と云薬用上品有り下品の物は玉なく塊をなす又
舶来の内、形松脂の如くよして紫赤色砂石の雜りたるものは下品
時珍説と云所の乳撮なり又薬店に和の薰陸と稱するものは琥珀の下品
よして乳香よあらず用ゆべからずこの物は奥州南部より出る琥珀之火
焼は松脂に似て臭氣あり今俗に薰陸と稱し蚊をいよすものこれ存
り和名本草に薰陸奥州に出ると云をみれば古より出ると見ゆ田村氏
の説に四川名勝志に福列に乳香ありて石の間より出乳香山と名づく
とあり本邦の人これらの説よ由て薰陸を以て琥珀の一物と心得て充
たるもの誤りなりと云り

薰陸樹



本草綱目 卷之八十一



本草綱目

卷之八十一

十八

一種

れんちやくすきのす羅
ますちやくきほむ蘭

同書に載る回葉の形
竹葉椒に似て短く又
皂莢の葉に似て莖は
直葉を生ずる一監扶
子の葉の如く葉の間は
房をなして碎花を閉
き実を結ぶ山椒の如く
紅色なり



没薬

めいろうら羅
めいられ 荷蘭以上
物印忙 ぎゆんみめるれ一羅
めつらは蘭

和漢共子なり故に集解の形状詳かならず物印忙に載る回を以
て按る子葉の形桑の葉に似て互生し枝幹黄褐色にして葉の間は
曲刺あり花実の形は回せざるゆへ短るべからず製薬の物舶来あ
り一種ハ州り没薬と称して塊大ひなり黄黑色にして堅く土石まじ
りてあり味苦く香しこ水真物にして薬用上品なり中嶋の説に唐璽
持来る中琥珀色の如く透明あるを上品とす然れも透様計りは来ら
ず黒色にして砂石を挟む大塊の中子雜へ合せて持来る是を薬肆
よ於て煉没薬と云真物にして水脂なり別子類なり一種花没薬と
称して廣さ五六分長さ一寸計り扁き子の如き七の重れり淡赤色
にして光澤ありと云り

沒藥



麒麟竭

血結 遵生 八牋

血奴 外科 正宗

瓜血 奴上

はるまふりゆみへら 和蘭物 印忙 さんいすだらこーす羅
だらーけんぶるー 荷蘭 中島

和漢共一物印忙の載る因つより樹高く従りちて枝たなく秋
棕櫚の如くよーて毛けなく樹の梢の数葉あつまりて芭蕉の如く其
葉長さ數尺周り紅色よーて堅たま紋りありて斜めみ紋なく洋蔥の
似て長大なり此樹より出る脂絞を以て麒麟竭を製す舶来の品は
真臘国より出ると云此中みちまきでと称するは數品あり中嶋の
説の粽様の中よ五ツ六ツ結ひ連たる者は上品あり又杖様は長さ大
と共に杖のじと一是も蒲葵冬葉の類よて包み藤を小く割て一寸
程間を置き結ひたる物なり筍様も右に准す此二種最も上品な

り又盤様あり状種々あり是は上品なり古渡のこちまきての
中に黒色を帯赤く光りあるものありこれを細末にすれば鮮
紅色なりこれ上品よーて薬用の良なり又新渡の物は長く包み
たるを大ちまきでと称す一小く包むものをこちまきでと云これ
も又大小上品あり又四角に包みたるをばんでと云これは下
品なりいつれも包みたる葉は麒麟竭なりこれを見て葉の長き
一を知るべいといへり舶来の中偽製の物あり或は包み亦を一
たるものには若葉蒲葵棕櫚葉亦を用ひたるものあり集解の説
葉似櫻桃而有三角と云小何物を以て麒麟竭としたるや未
だ詳ならす三角ありと云説に従て中古みつてと云木を充つ此樹
よりも脂出れとも麒麟の属に非ず



其類
馬
立



植物
卷之六十一

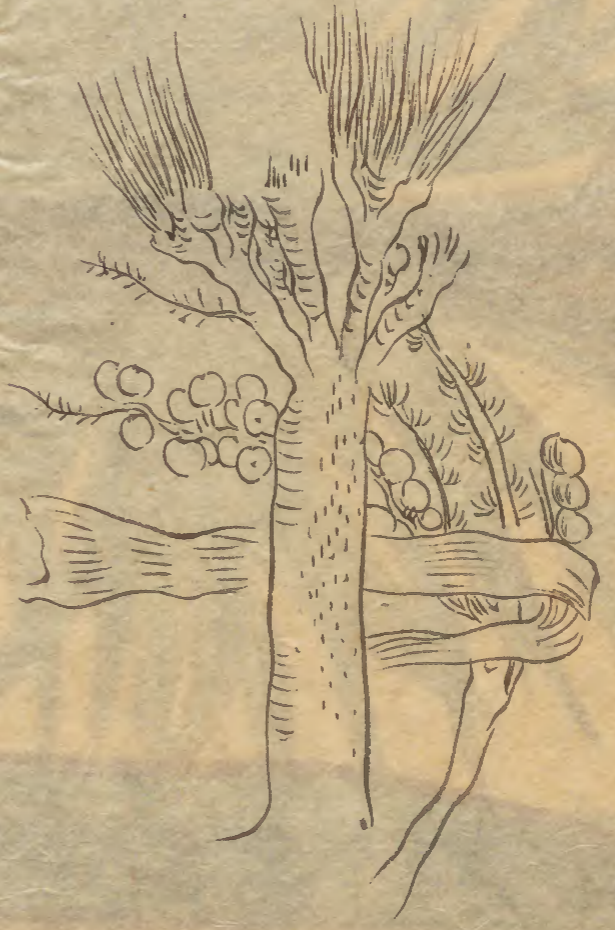


其類
馬
立

植物
卷之六十一

同

といぬらすよ載
る因取前條に似て稍
の枝を生ず又前條に
似たり花は穂をホし
て生し円き実を結ぶ
其色粉色なきゆへ明
ふらず



蘇合香

すていらくす

すとくらくす

和漢ともよな一物印忙は因あり葉の形ぶとうよ似て莖紅色面淡緑
背淡黄色花実の形詳かならず蘭山の説は舶来の物塊をなす者
を蘇合油と云といへり田村氏の説もこれ云り薬用は蘇合油
を用可なりと云り

一種

同上の因莖紅色よ一葉互生し形柳の葉に似て小ざし梢に花あり
形梅花の如く白色よ青色の筋あるし一ぼりの如し葉は黄色よ一よ
水り



蕙合香

一種

龍腦香

腦子附方

却布羅西域記

羯布羅香慈傳

藥却布羅梵語

かんぼらーほるぬーをー羅甸

かんかりせり荷蘭

むつりいんかいやあんまう滿州方言

和産方一集解の諸説老杉ふるまきより出るよし云れとも松類まきの香子あらざ樟類の香子似たり先子龍腦りゅうのうの写生を蘭人持来る其図を見る子葉の形牡桂の葉に似て薄く樟葉に似て長く三の縦道あり莖紅色より對生す葉間子枝を分て房をなし細き枝を生し五瓣の小白花を開くこの物もの由よて本邦の物を考かふるこいまくす一名あかくすと云もの樟しょうの類るいあり豆列志まめ嫩芽なみ紅色樟腦しょうのう珠たまご多おほし云り此この香かを採り試しむる枝葉の香氣かき烈はげしく今いま龍腦りゅうのうの香かあり然しかれとも未いまた小木こぎより腦のうを採り試しみさるゆへ決けつせざれとも先年せんねん蘭人らんじんいぼるといふ枝えだを見せしかんかんふるぼしとなりといふ由よしは龍腦りゅうのう樹じゆの決けつりすとす龍腦りゅうのう舶来はくらいの物もの古ふるは蜜産みつの物ものをよしと漢の物ものを下くだす今いま然しから漢かんの物もの色いろ純じゆん白はくよりて輕かろく花片はなの如ごとしもの梅花片ばいと云香氣かき烈はげし其大おほなるものを大梅花たいばいと云これ本草ほんそう原始げんしの片腦ぺんのう又氷片ひよう也新渡しんは純白じゆんはくならずして水色みづいろこころ水みづ又上品じゆんひんこ又藥店りやくで樟腦しょうのうを以もつて燒やく片腦ぺんと稱なづけ賣うりす真まく真物まもの

を擇えらび用もちゆべし



樟腦

くすのやよ

朝腦 本草原始

樟氷

外科正宗樟は樟の誤なるべし

本邦より落列肥前より樟腦を創製す其法集解と異なり先づ生木木心赤黒色なるものを伐り細かく小片となし又根も同一く片となし其片を遠籠きんろうに入水釜の上より置き、器を以て蓋とし上を以てめめりきをなし氣のち水ぬやうよりかま籠より強く火を焼とき樟腦斜りて器につくこと露珠の如しこれを籠より取り冷しむれば器内の腦を結すこれを取りて用也此樟腦樹は前よりいたすせうのふほくなり

阿魏

ててし

阿虞截

面陽 雜俎

哈昔泥

通雅蒙 古の名

あつさーちたふりゆちやす 和蘭物 印忙

あつさーふていだー 羅 旬

といふるすてれつき 荷 蘭

和産なし物印忙に二種の例あり其一種は秋馬行の葉に似て肥大し一莖五葉其一莖亦長みありて粗き鋸歯ありこれ檳榔の説に苗葉根葉莖酷似白芷と云ものご合り又一種は木本の如く葉五生して樹花の如し檳榔西陽雜俎

を引て木長八九尺

皮色青黄

三月生葉似

鼠耳無花実

と云るご合り此

二種の物の津液を揉り膏となすものなり舶来の物数品あり先季織人へいす

とる長崎へ持来中白鴉色より葉色を雜へ臭氣ありといへとも蒜臭とは異

より其膚質察して栗の如し是真物より本草原始に謂ゆる栗魏なり又茶褐色

ふる者あり真とすべし蘇恭の説に波羅門云葉黒葉深即阿魏と云といへども

薰渠又興渠とも云葉部の胡荽なり阿魏胡荽とも性質臭より能臭を止す

同一けれとも興渠は他家林示食する処の五字の一なり猶葉部胡荽の下に阿

魏と存す説ふれば別物あるべし然り此物漢土とも真物少きゆへ存

るべし蒜を搗て他物をまじへ偽り充るの説多し真物を能見されは舶

来の物も偽物多からんこと於て察せり

阿魏
草本の物



木本の物

盧會

あだん

盧蒼

府志

龍舌草上

象膽 本草
原始

あるにす

あるにことりなる

本邦古はな一近來琉球より渡り人家に培養す同国より渡る阿咀
 呢の形状頗る似たれども別物なりあんの葉は長さ二三尺幅二寸一幹互
 生す形蘆薈の茎の如く白乳ありて圍りて角刺あり全体肥て厚く肉多く脂
 液甚粘滑なり夏月葉の間より三四尺の茎を抽て未穂を存し花を開く形筒
 子よりて全く開かず蘭蕉花に似て小く黄赤色なり此物熱国の産物へ寒
 きを恐る冬雪中に養ふ小べ一集解し木脂のや小云草蘆蒼龍草なくもあ
 るを以て別種とするは非なり今蛮人あだんより蘆蒼蒼をとり又一統
 志に云処證となすべし且寒を恐るゆへ寒國にては草の如く暖國に養
 小物は肥大よりて其樹稜の如し然れば樹と云ても可なり本邦にては
 可なり本邦にては日向紀列豆列房列等々裁ゆるもの枝を分て樹
 となるなり



本草綱目卷之八十一

二十八



あだん

本草綱目卷之八十一

同

物印忙の図



花黄紅色の物

一種

同上

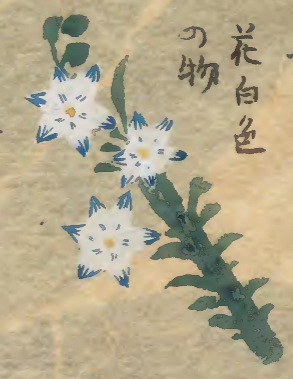
一種

同上

一種

同上

花白色の物



一種 同上
花葉の物

一種 同上

花黄紅色の物



一種 同上

一種

同上

一種

同上

花白色、褐色の
紋理あるもの



一種 同上

花淡紅色
のもの



層會るくわいを製せいするものは前より固する葉の肉と皮を去り其間の津液を
とり絞れば黄赤色の脂出るとこれを陶器たうきに入日乾すれば膏こうとなるこれを薬
用とす舟来の内にも数品あり形熊膽ゆうたんの如くみりて大に外皮厚く内黒
色肌細く光ありて味苦き一熊膽ゆうたんの如く瀝れきみを帯るもの真物なり
又形舍利の如く塊を赤くして黒色なるものあり味強く甚重からざる
ものは薬用すべし塊大く赤色を帯て重く末まつとなす石の如きものは下
品よして雜りあるものなり用ゆべからず本邦ほんかうにては偽物多きゆへに擇
ひ用ゆべし此物功用多しといへとも狐きつねを用ゆれば死し又誤用ゆれば死
し誤用ゆれば吐血を發すと云きみればつゝみ用んべし可なり

本草圖譜卷之八十二目錄

喬木類

藥木 一 種

檀 榿 四 小 藥

黃 檗 不 詳 厚 朴

一 種 ほりのき 一 種

一 種 大山れんげ 一 種

一 種 物印に載る図 一 種

本草圖譜

卷之八十二

一

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 檀, 榿, 藥木, and 厚朴.

一種	全上	三	一種	全上	三
一種	全上	三	一種	全上	三
杜仲	光りゆみ	四	一種	さびがつ	十五
一種	ちやんちん	十六	椿	物印の岡	十七
一種	うるし	廿一	一種	はにれ	廿二
梓	あつさ	廿三	楸	あかめり	廿四

本草圖譜卷之八拾二

喬木類

東都 岩崎常正 著
 男 岩崎信正
 門人 小山廣孝 校

本草圖譜

藥木

キワタ 樹皮黄色

黄木 本草和名

檀 同書刊

敬根

掉換

檀無根

共に

根黄 發明

ハエリツ 名

アマレル アルモヤシ 同

享保年中朝鮮ヨリ黄蘗の子渡りに由て官園に栽させらる大樹と
なれり其葉和産の物に似て葉の莖綠色にして光澤ありて長一花実
中和産も同一外皮灰白色にして樹皮に似たり肉の皮は純黄色なり
て此川黄蘗なり此皮を剥には春の被岸より秋の被岸の間に取り日
に乾し用巾べし田村氏の説に粗皮厚くして軽虚柔軟なり弓の振皮
となすべしこれを振る時は暖なりといへり又易列志に黄粗の重皮
を暖皮と云然るに時珍は暖皮を以て梳木皮の一人す怪むへきと
いへり又熱を解し酒毒を消すといへり

一種

大和本草に本邦如々に是ありと云其和産の物は葉對生して形漆
の葉に似て是をきれば臭氣あり夏月枝ノ梢に細枝を分ち小き黄
花を開く雌雄ありて雌なる物は実を結ぶ形胡椒の子の如く熱す
れば黒色味ひ苦く微し香あり乾くときは五稜あり大和本草に此
実をシコノヘイと云垂語なるべし味ひ苦きゆへ虫を殺し腹痛を
止むといへり蘭山の説に今市師茶舗に賣ル所二品あり木曾の山
中より出すを美濃皮と称し上品とすこれ川黄蘗之葉用深用と由
に良とす江列葛川より出す者北山とす茶用深用共に下品とす
これ山黄蘗とすいへり

本草綱目卷之八十二

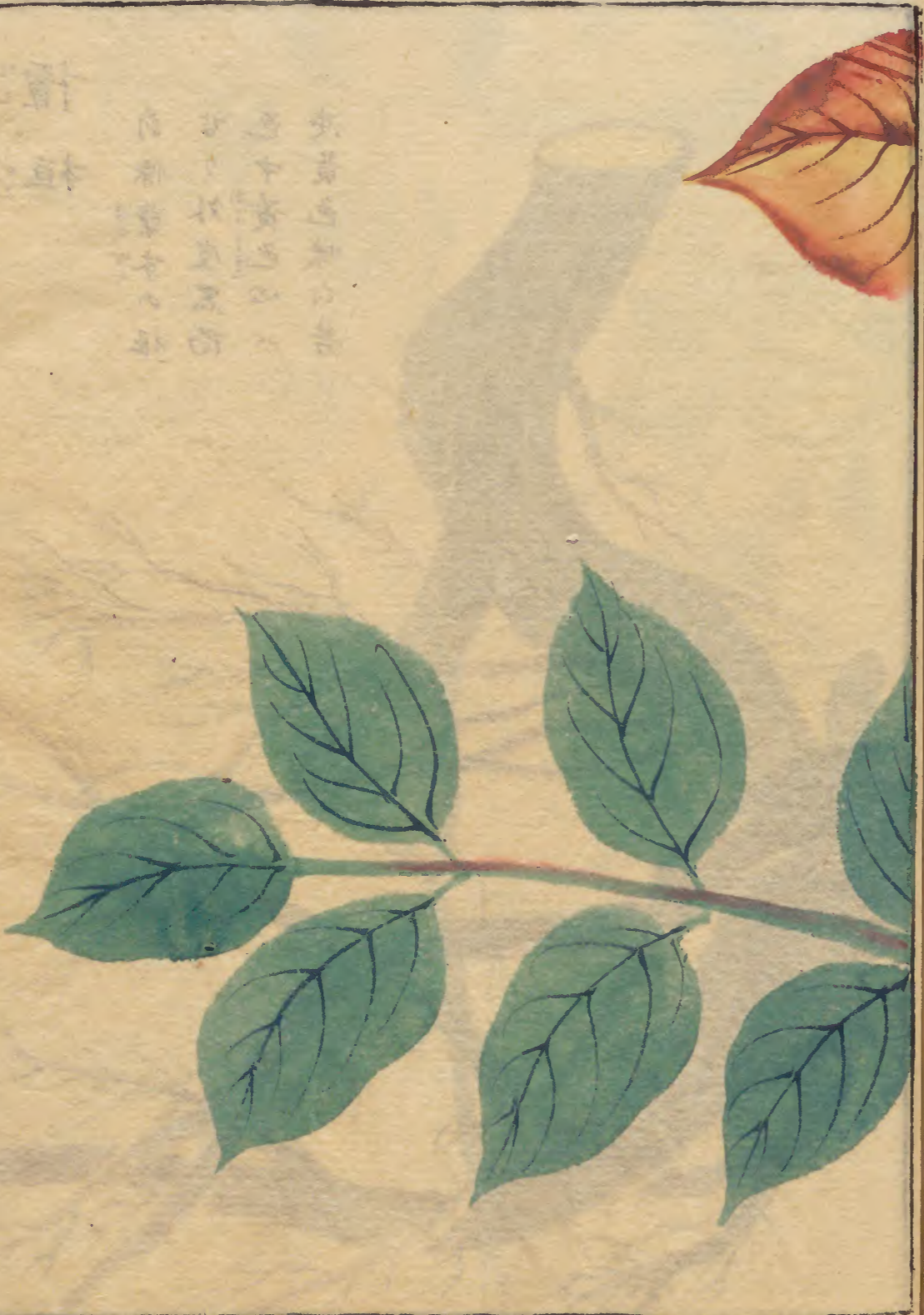


三



藥木 はくばく

本草綱目卷之八十二



此葉...
 其葉...
 其葉...
 其葉...



一種

檀 栴

前條 藤木の根
甘り 外皮 黒褐
色 中 黄色 心
淡黄色 味 苦



本草綱目 卷之八十一



小藤 ちうはく

めき

めぐい 雲

こかねん 下 紀

にき 下

こそり 下 勢

にわけい 下 能

山中に多し高さ五六尺に過す枝多し
繁茂す葉の味に細き刺是多し葉曰栝
杞に似て小く短く光澤あり春月葉の
間に白色にして大き二分計りの花
を下無す後実を結ぶ形赤小豆の如
秋の末紅色に樹皮褐白色粗皮を削
り去は黄色に古く黄岑に傷りこそ
ありとあり和名に眼病に此樹を煎し
洗へば目といへる故にめきの名あり又深
用にもなすべし



厚朴

厚薄

証類本草

榛樹皮

備用

重皮

本草和名引 収薬性

スコレイモセバリニス

ウアーゲホーム

真の厚朴は和産詳ならず和名本草和名にまはかす訓するに古より厚朴の皮を用ゆは厚朴の属せしる種類遠く下品とすは皮は外白く肉薄く味は酸厚朴の効に及ばす一種俗に唐厚朴と名づくるあり此も非とす又薩列厚朴と称するはたふのきの皮と云たふはからたもにて楠なり又蝦夷厚朴と称する蝦夷にていかるふにまらふにしとも云用て頗る効あり文政年中越後より採出す蝦夷の物に勝れり是又厚朴のきなり又朝鮮より渡るあり蝦夷厚朴に似たり舶来の物古渡の物は厚さ八九分にして肉赭色にして香氣ありて味苦辛上品如此品以本渡りす寛永年中に來るは皮厚く小辛味あり其色薄く又葉肆に類ちがひと呼あり皮の肉堅理ありて柔なり本邦にてほくの木の皮を楊梅皮汁にて洗滌るあり昔年漢土より厚朴の生葉を持來り脂葉にたるを目撃するに其形大山れんげと云水に似て紋脈たよやくに鬚鬚たり厚くして面明潤まざる様に見ゆ其真偽詳かならず蘭書物印に枚種載る図あり下に出す

一種

ほののき

淡泊

録 転耕

唐厚朴

俗

古より高州厚朴に充つ備急本草に図する如花葉の形状相似たり此物厚朴かふるに逢ハ根皮を採り代用すべし其根皮微し香ありて味は苦く滋味あり此樹長すれば高木となる春月葉を生す嫩苗紅色を帯ひ長すれば長さ一尺余幅三寸計り是厚く春の中枝の梢に花を生す白色に微し紅を帯ひ形蓮花の如く瓣甚厚く紫紅黄の長き葉をなす香氣より後葉を結ぶ形梅松子の如く鱗甲ありて長さを五六寸熟すればさけて深紅色の実顯是美なり秋月落葉をなす

一種

葉の形前条に似て紅色なり綠色花も前条に似て紅色なり正白此物葉用には前条より収り劣れり

本草綱目 卷之八十一



ほろのき

本草綱目 卷之八十一

本草綱目卷之八十一

九



一種

本草綱目卷之八十一



本草綱目卷之九十一

一種

大山志保ヤ子れんげ



或は云延宝年中唐土より渡ると云り樹高き
に至る葉はヨリれんげに似て厚く花の形ほく
のきの花に似て稍小さく白色なり葉の形頗
る菊花に似たり実もほくのきに似てゆ樹
皮白色味ひ苦く辛く香氣あり根皮を採り
用ゆれは知あるべけれども希なるゆへ基用
なしかた



本草綱目卷之九十一

十

本草綱目卷之六十二

一種

葉の形前條に似たり花も又同一葉細くして四方に散開せり



一種

物印牝に載る四葉の形柳に似て中は青色中は紅色之葉の間縫ある花実何れなるや分明ならず



本草綱目卷之六十二

本草綱目卷之九十一

一種

同書に載る
圓葉の形柳
の如く花は
細葉の蓮花
の如く紅黄
色なり



一種

同書に載る圓葉の形
、牡丹の如く花は
に似て黄紅色
なり



本草綱目卷之九十一
十二

一種

同書に載る図
葉の形状み、
なくさにて似たる
花は頗るだん
とく花に似た
り



一種

同書に載る図
葉の形上の物に
似て先尖り黄
をなす花の形菊
花に似たり



本草綱目卷之八十一

一種



同書に載る図葉の
形柞木に似て田く
花は野菊に似て褐
色なり

杜仲

はまゆみ 本草和名 まほまゆみ やまにきび まゆみ

まさき 江戸にて籬とす まさきは別物なり 中越 まほまゆみ

まみな土 列 ますすき 列 みやまゆみ たまてはこ 実の

さるのーはこ 濃 みこのす 冊列 ソチこす 以上

大戊 本草和名 木精 同書引 山精 同書引神

棉花 本草 又ンケニ 蝦夷

古説に随てまゆみを充つ種類多く諸国山中にありて喬木となる樹皮をとりて折
は白き糸あり葉は梨の葉に似て狭く長く方茎に對生す春月葉の間より細枝を
生し花を闊く形小く衛茅の如く随て実を結ぶ一房に数十顆下垂す其子外皮
淡紅色大さ小き鈴の如く四に裂て内の実顯る紅色にしてまき或はに
まきに同一葉和冬紅葉して落つる田村氏の説に長崎の某圃に漢種之物あり和

本草綱目卷之八十一

五産と異なることなりといへり

五産と異なることなりといへり
五産と異なることなりといへり
五産と異なることなりといへり
五産と異なることなりといへり
五産と異なることなりといへり
五産と異なることなりといへり
五産と異なることなりといへり
五産と異なることなりといへり
五産と異なることなりといへり
五産と異なることなりといへり





一種

さほどつ



用切真切あり又江戸花戸にて唐杜仲
と云高本となる樹皮黒褐色葉は桃葉
珊瑚さびに似て短く深緑色にして光澤
あり一とところ三葉つ對生一冬月落葉す
春月葉の間より細枝ヲ分ち八瓣の花を
開く黄青色大さ四五分後実を結ぶ四稜
あり熟すれば四つに烈まけて内の実顯る

本草綱目 卷之八十三

一種

一 甘のき

一 甘のかわのき 細

へらのき 丸 またのき 夏

藤頌の説に葉亦類柘と云
又本可作履と云に因て考
ふれば山中にありて樹皮
青褐色此皮柔軟なるゆへ
以て繩と甘一又裂て馬の
頸に掛るに用ゆ此物な
ん此類大葉小葉二種あり
此物業の形柘に似たり葉
の間よりへらの如き物を
生し其中より莖を生し莖
の先に数花を結ぶ



本草綱目

卷之八十三



椿

四物印の



一種

古へあり椿をつはきとすは誤り也先輩ちやんと以て充るも
穂かならずちやんちんは甚臭氣あり今按するに椿は香氣あり
ゆへ群芳譜に香椿と名け秘傳花鏡に椿の條に一種以椿而
葉臭有花結莢者俗呼為臭椿是椿非椿也と云に因は椿はちやんちん
に非ず椿はちやんちんに的當なること決すへ一臭香椿は和産甘
く物印忙に圓あり葉の形桑の葉に似て小く円莖に互生す莖葉とら
に綠色枝に紅を帯へり

一種

同書に載る圓葉の形杓杓に似て四く圓莖に互生一莖葉共に綠色
なり

標 ちやんちん 京 きやんちん 同上 らいでんほく 丹波常州

ゆみぎ 土別 ふうふうらす 武州玉川 くもやぶり 勢別

しろはせ 土別 やまのゝる 駿別 やみやらのき 奥別

ひんぼく 防州 ひよかのき 同上 てんつ 江別

さうへんほく 江州 鬼目 証類本草 獲通 通 悪木 名物方言

臭椿 群芳譜 大眼桐 中山實同

山野に多し直上して高さ五六丈莖中枝粗にして稀也葉は漆に
似て窄く嫩苗紅色を帯ひ円莖に互生す枝葉甚だ臭氣あり数年
を經る物は梢に穂をなして五瓣の小白花を開き後実を結ぶ五
稜ありて形れんけうの莢に似たり外皮黃褐色自ら裂ち形五稜
ありて桔梗の花に似たり詩唐風に山有栲と云は是也一種雄なる
物あり花葉とも同し



標くわ



本草綱目卷之八十一

漆

漆澤

本草和名
利雜要訣

まろんを つ 宝鑑

らつく名 らつか上

山中に自生し又培養するゆゑの多し高木とある大葉は一莖にて
九葉對生し黄白色の小花楨生す子は田くして扁し此実より
端を採るこれをうるし蠟といふ此樹皮は切めを付置は白き暗
液流れ出るを器にとり日にかきませ曝し貯へ器物をぬるに用
ゆ本邦の物を以て上品とし漢土の物を以て下品とす奥州羽
州野明より出すは色白くして性強し俗にせしめうるしと
云物を接し用ゆるゆへつぎうるしとも云日州より出るは小
細工に用ゆ和州吉野紀州熊野諸山より出るは力弱しつ
やうるしと云上ぬりに用ゆ粉色に用ゆる漆は吉野を上
とす薬用にす乾漆は漆店にて桶に貯へ置き其辺に
自然やけつきて形蜂の窠の如く也黒くして軽く上品なり

葉鋪にて篋目様の乾漆といふ集解私景の説佳とす
へし又別に薬店に岩乾漆と称するゆゑありてこれは海岸
にある黒き石にて乾漆にあらず用ゆへかすすこれに焼
は硫黄の氣ありこれ石の部の石炭也舶来の乾漆は桐油を
混入すると云説あり用ゆへからす大和本草に乾漆は搗碎さ
煨り熟すへし々からされは腸胃を損す漆の毒に中り死に至
るゆゑあり早く療すへし蟹及蜀椒最りよく毒を制すといへ
り

一種

はにし 和名はドはぜ はせうるし やまうるし

葉の大小実の大小数種あり葉は漆に似て狭く尖りあり秋よく
紅葉をなすはせもみしと云諸國多く栽て実より蠟をとる夏
月枝の梢に穂を生し黄白色の小花を闇き後実を傳ふ田く
扁くして下垂し熟すれば黄褐色となる



漆



梓

あつさ 和名 水草

ひさき 和名 致

きもみーきさ、け

雷電きり

はふてこぶらかわらかー後

かみなりさ、け 越かわらさ、け 濃かわらきり 常

こーんこー 肥

たらすけのさ 讀

梓 文説

梓と楸と異論あり集解に陸機詩疏を引て楸之疏理白色而生
子者為梓とい、又時珍の説に本理白者為梓赤者為楸と云此等
の説を考ふれば梓はきさ、け楸はあかめかーわなること明也
人家多く栽ゆ樹高さ一丈余に至る樹皮白色これ梓白皮に
て葉用とす葉は白葉に似て三尖或は五尖ありて海州常山
に似たり夏月枝の梢に穂をなして白色に淡紫色の細点
ある花を開く形鳳仙花に似たり後細き角を結ふ形紅豆の
角に似て瘠て硬く下垂し破れは中に子あり



梓



梓 木也 葉大如掌 實如蠶豆 其皮可為紙 其木可為器 其葉可為藥

山野に多し樹直立して高さ二三丈計り葉初生紅色を帯て藜
の如く形桐の葉に似て三角尖りあり莖も紅色也夏月枝の梢
に穂を生し小花を聞く淡黄にして緑の如し後実を擧簇す
黄褐色にして軟刺あり中に小黒子あり形椒日の如し

あがめかーわ京 こそいは 州播 ーはき 州阿

かわらかー豫 ごとやば山 あか、ぢ 同上 加茂

さいゆーは 中越 楠 雅通 萩 上同

山野に多し樹直立して高さ二三丈計り葉初生紅色を帯て藜
の如く形桐の葉に似て三角尖りあり莖も紅色也夏月枝の梢
に穂を生し小花を聞く淡黄にして緑の如し後実を擧簇す
黄褐色にして軟刺あり中に小黒子あり形椒日の如し

